# 名所物見の旅　其の四拾九　天上の湯・念願の仙人温泉に入る

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

仙人温泉の露天風呂。“天上の湯”と命名されているとおり、黒部峡谷を隔てた向こうには白馬三山をはじめとする後立山連峰が聳え、眺めのよさを誇っている。

裏剱での三日間の滞在を終え、翌日には今年の営業を終了するという仙人池ヒュッテに別れを告げて仙人谷を下る。夏場には雪に埋まっている仙人谷も、十月中旬の今は所々に小さな雪渓を残すだけである。いずれまた半月もすれば、新雪で埋もれてしまうのだろう。今日は長年の宿題であった仙人温泉に入る為に十分に余裕あるスケジュールを組んであるので、のんびりと歩く。仙人池ヒュッテで知り合った金沢の会社員とその上司らしき重役タイプの人、そして獣医だというドクター氏といっしょに四人で仙人温泉を目指した。

北アルプス山中に涌くいで湯には高天原温泉や仙人温泉、白馬鑓温泉の三箇所が知られていて、特に高天原温泉と仙人温泉は徒歩で往復三～四日は掛かることから、温泉マニアの間では秘湯中の秘湯として名を馳せている。以前は仙人湯と呼ばれていた仙人温泉の歴史は、明治末から大正の初め頃まで遡ることが出来るようだ。大正十一年（1922）にこの地を訪れた登山家の冠松次郎は、砂に埋もれた浴槽の泥砂を掘り出して入り、天幕を張って幕営したと記録している（續黒部渓谷）。源泉が吹き出している近くに湯小屋と浴槽があったが、大正十一年には湯小屋は跡形もなくなっていたようだ。昭和四十年頃に源泉から引湯して対岸に新たに湯小屋が建てられて仙人湯として営業が始められ、現在の仙人温泉に至っている。

仙人温泉小屋に到着して入口で入浴料500円也を支払う。温泉は小屋の中を通らなければ湯船に行くことは出来ないようになっていて、勝手に入浴したり、ドカドカと入り込んで写真を撮ることを防止しているという。私とドクター氏が到着した時には先行した金沢組は脱衣中で、我々も後に続く。すると突然「ウアーアチチチ・・」と悲鳴ともつかない声が聞こえたので振り向くと、金沢氏が飛び上がっている。重役氏も「何だこの熱さは！」と湯に手を入れて怒鳴っている。湯船には常に源泉と水が注がれて適温になるはずなのだが、どうやら昨夜の泊り客が朝風呂に入った際、ぬるいので水のホースを外してそのままにしたようだ。朝から源泉だけが注がれていたので、湯船の中は熱湯状態だ。我々は今度は源泉のホースを外して、水だけを注水して待つことにする。小屋番の親爺さんは頭を掻きながら「うっかりしてたな。ま、5分もあれば入れるよ」と言うのだが、15分や20分はかかりそうなので食事をすることにする。朝の撮影で忙しい時は一切食事はしないことにしているので、朝から水しか飲んでいない。そろそろ10時になるので、待ち時間を利用して昼食を兼ねて済ませてしまおうと愛用のガソリンコンロに火を付けた。金沢氏らは服を脱いだままで湯を掻き回していたが、「寒くなってきたよ」と震えている。どうにも怒りが収まらないようで、「まったく・・。親爺、湯の管理ぐらいちゃんとしとけよ」と怒鳴りだす始末。

北アルプスの秘湯、仙人温泉は仙人谷の一角にひっそりと建っている。

ところが親爺さんはというと、額入りの大きな写真を持ってきて我々に見せ「これ、この間一人で泊まりに来た女の子が記念写真を撮りたいって言うんで、一緒に入ったんだ」と女子大生ぐらいの娘さんと二人で湯に浸かっている写真を見せるのだった。「かわいい子だったなぁ」とうれしそうに笑っている。我々も「親爺、やるじゃないかよ」と大笑い。そして親爺さんによれば明日はテレビ取材が入るのだという。なんでも秘湯探訪でパパイヤ鈴木氏が登ってくるらしい。我々が「なんだ、もっと色気のあるのが来ればいいのになぁ」と言ってまた一同大笑い。もっともこんな山中まで登って来られる女性タレントなど、そう簡単にはいないだろう。

熱湯騒動も一段落して湯も適温になったので、さっそく入ることにしよう。仙人温泉は長年近くまで来ながら今まで入るチャンスがなく、やっと念願かなって入ることができた。う～ん、感無量。連日の山歩きの疲れが吹き飛ぶような、快適でとても心地よい湯だ。ここ仙人谷上部は開けているので湯船からの眺めもよく、黒部峡谷を隔てた向こう側には後立山連峰が連なり、白馬三山が真正面に見える。北アルプスのもうひとつの秘湯・高天原温泉（2006年8月25日号で紹介）は野趣溢れる温泉であったが、ロケーションの良さでは仙人温泉の方が確実に上である。次回訪れる時は是非ここに泊まることにしよう。この露天風呂に浸って満天の星空を眺めたらどんなに素敵だろうかと思う。

山のいで湯を十分堪能した湯上りにはビールでも飲みたい気分だが、これから黒部峡谷の谷底まで、梯子やロープが連続する雲切新道を一気に下らなければならないので、ここはぐっと我慢する。ドクター氏が親爺さんに「こんな山奥で客が来ない日など寂しくないですか」と聞くと、「カモシカや猿も来るし、楽しいよ。そういえば熊が小屋の中で冬眠してたこともあったなぁ」と泰然と答えるのであった。富山の人かと思っていたが、意外にも都市近郊の出身で、縁あって数年前から小屋番をしているということだった。温泉を後にして山を下りながら、価値観の違う重役氏は「まったく出鱈目なことをやってやがったなぁ」と言うのであるが、私には親爺さんのユニークさと人の好さは大変好感が持てるのだった。